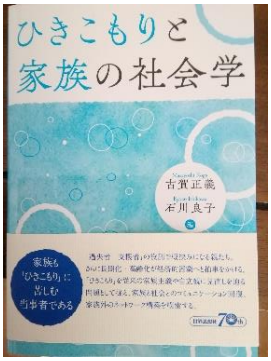
第8号:通算58号
（3月号）
2018年3月1日

七里が丘こども若者支援研究所

今を生きようみんなOK！

それぞれの風　『ひきこもりと家族の社会学』を読む

（古賀正義＆石川良子編）　1月30日発行の案内を受け本屋へ足を運び購入した。精読したつもりだが拙い概観、社会学的分析の有効性、ぜひお読みください。（世界思想社　2700円）



「ひきこもりが個人の学校不適応などの問題でもなく、医療的な精神疾患でもない、これまでの原因論では読み解けない、原因不特定な社会問題として認知された(p59　古賀・五味)」と1990年代からの調査を総括し「多メディアを通じて、当事者の声が広く集積され拡散されることによって、問題の得意性や困難性が伝えられ、問題の可視化がもとめられる(P71　同)」と各(研究)領域や親の会・支援団体と行政支援への理解と行動がすすんだと本書は振返る。

そして「ひきこもりが問題化するやいなや、親あるいは家族に何らかの原因を見つけ、援助の担い手として組みこむ力学が働いてしまう。子育て過程における過失的要素すなわち振り返ると見過ごしてしまったトラブルと、育てなおしの援助的要素すなわちいまここでやらなければならない対処とが、親あるいは家族に二重に襲いかかる(p78　古賀)」「かれらは“ひきこもりの子の親”となって…親戚や友人とのつながりさえも失い、家族総体が“社会的ひきこもり”状態へと至る例もある(p106　山本)」「居場所が社会から消えていくにつれて、かれらは家庭へと追い込まれていく(p118　山本)」と古賀は家庭総体の問題と指摘する。

石川は序章で「家族は“ひきこもり”を否定する社会のエージェント(代理人)として立ち現われている(p1　石川)」「家族は単なる関与者なのではなく、かれら自身も“ひきこもり”に苦しむ当事者なのだと言える。本書が何より掬(すく)い上げたいのは、このような当事者としての家族の葛藤と苦痛である(p2　石川)」とテーマを語り、ある家族の自叙伝アプローチを展開する。「(父)は“仕事人間”…自分を見つめ直す“きっかけ”になったのが娘の不登校だったという(p171　石川)」「(娘)全然かわっていないし、あなたたちだけがただ2人で変わっているだけで、全然あたしは変わっていない(p199　石川)」と。「親の“生き直し”の陰で、子どもの“生きづらさ”が取り残されてしまう可能性は消し去れない(p203　石川)」と複合的自伝を整理する。「一家の歴史に敬意を払いつつ、家族問題ではなく社会問題として不登校や“ひきこもり”を論じるための視点を形成していくことは、かれらの物語の聞き手となった私に課せられた責任である(p204　石川)」と石川自身に位置付けた。

「ひきこもりを生まない健全な教育家庭をステレオタイプに描き期待することは容易だが、今日その圧力がきまじめで生きづらさを抱えたひきこもりの若者を、家族とともに一層社会的排除の方向へと押しやってしまうこと、すなわち“まじめさ”の表象がかえってひきこもりを促進すること、を銘記すべきである」「“アウトリーチ(Outreach)”の字義通り、これまで手の届かなかった者へ“手を差し伸べる”試みを今後も続けていかねばならない(p212　古賀)」と古賀は終章とした。本書は家族と歩む僕の指針となる傑作と理解する。(滝田衛)

コラム風　ひきこもり　親と家族　社会と支援を考える

○2月11日応援団会議、子どもと親の世代が自由に語り合う意志の交流をし始める実感ある会議となりました。まるでp1の紹介著書に返信するように…。

（※写真　川辺悟史さん撮影）

◇マジェスティックや鎌倉 Largo＆逗子 cocolo で活動を始めた涌井さん(横須賀：ベテランひきこもり)が「オヤジがいやなんだ」と穏やかに語る、M さん(小田原)は「不登校の子を心配しているが、実は母の私が**安心したいから**なんだろう…」と。田中さん(横須賀：子の育ちに葛藤)「一体自分は何者なのかと問えば、自分が**自分を生きていない**～」と共感する。橋本さん(逗子：不登校だった子は留学中)「**親も当事者**、自覚する辛さがある」、村上さん(横浜：ひきこもる子を見守る)「自分の安心のために**ここに来る**んです」と。川辺さん(横須賀：ベテランママ)「不安がる子に『何かしなくては』と私の癖がでて子の人格を信頼できなくなる**私に気づく**」、すると新舛さん(逗子：明日から実践できる講演会を企画)は「親の辛さを受け入れるのは難しい。**当事者の辛さ**を理解して！」と切り返す。

□リトルエジソン活動の龍崎さん(横須賀：仕事は SE)「僕は11時間働く、苦笑。“忙(いそがしい)”と言う字は“心”を“亡(なくす)”と書く。いつも『自分がない』『自分を知りたい』と悩み応援団や他の活動をし、自信を持ち始める自分に気づいた。そこには人と人との関係があり、

他人は自分を映す窓であると思う」、会議は高潮。涌井さんが「実は自分のオヤジは**“そういう人だ”**と理解できるようになった」の発言に参加者は和む。そして島根さん(横浜：元居場所主宰など)「私のテーマは**『私を生きる』**。考え方の違いが戦争になる、違いを受け入れるの。自分の当たり前を壊すのは大変、涙が出るほどに…」、会議は安堵する。

△写経の意義、孫の不登校で息子の成長を思い出す、塾で学ぶ意義も交流。

○2006年頃、大学院生の**石川良子さん(p1編者)**はひきこもり卒業論文のフィールドワークに、立ち上げ間もないNPO法人アンガージュマン・よこすかを訪問。インタビューに答えた僕の記憶は新鮮。その後も内閣府や横浜市若者支援事業で顔を合わせ、誠実かつ継続的に同世代の課題に向き合う女史に敬愛の念を抱いてきた。松山大学社会学准教授、四国などで若者の支援活動に大活躍(facebook)だ。

○余談ですがアンガージュマンは街場で書店を小さく経営している今も。アナログ人間の僕は書店に足を運ぶ日常。ぜひ街の書店に寄って下さい、“アマゾン”だけでなく。(滝田衛)

3月予定○**4日(日)午後1時**講演会 in 研究所＆応援団会議「ひきこもり心を理解する」林恭子さん(UX会議ひきこもり女子会)、座談会：林恭子さん＆新舛秀浩＆母親2人

○**25日(日)午後2時～**応援団会議　逗子市市民交流センター

○**3月27日(火)午後1時30分～**ひきこもりを考える講演会 in 鎌倉市青少年課明石紀久男さん(インクルージョンネットかながわ)、岩本真実さん(NPOヒューマンフェローシップ)＆滝田　鎌倉市役所第3分庁舎講堂

◎Largo10日(土)、22日(木)，29日(木)　**◎鎌倉市相談センター**6日(火)大船小,7日(水)、13日(火)富士塚小,14日(水),16日(金)、20日(火)、22日(木)、27日(火)、28日(水)**◎研究所相談**8日(木)、15日(木)、22日(木)、29日(木)

ご案内4月22日(日)午後1時
「不登校の『その先』君の笑顔が見たい」 in 建長寺
講演：中村賢龍教授(LOCKET)対談：松尾鎌倉市長
コーディネーター滝田　※別紙参照

【発行編集：滝田衛】携帯：09072124055　**メール**：gq5656r9@happytown.ocn.ne.j
ホームページ：http://shichirigaoka-lab.jimdo.com/

永野亜由美さん(広報)が HP をリニューアルしてくださいました。